

社長所感（平成 29 年 1 月）

あけましておめでとうございます。  
健やかに新春を迎えられたことと存じます。

今年の干支は酉（鶏）ですので、鶏にちなんだ言葉を探してみましたが、どうも鶏は日常的で、ありふれているためか、良い表現が少ないようです。

正月の画材によく使われる鶴との関係で「群鶏の一鶴（多くの凡人の中で極めて優れている一人の人物）」という慣用句がありますが、鶏は、鶴の引き立て役とされています。

また、牛との関係では

「鶏口となるも牛後となるなかれ」

「鶏を裂くに牛刀をもってする」

などの慣用句がありますが、牛との対比で鶏の小ささが意識されているようです。

さらに、「鶏鳴狗盗」という四字熟語があり、その出典となった出来事自体は大変にドラマティックです（史記の孟嘗君列伝）が、「鶏鳴狗盗」という言葉は、鶏の鳴きまねのようなくだらない才能、転じて、くだらない才能でも時と場合によっては役に立つことがあるという意味です。

また、西洋でも「チキンレース（双方が対面して車を走らせ、先によけた方を負けとするゲーム）」という言葉があり、ここではチキンは臆病者として扱われています。

どうも、洋の東西を問わず、鶏は人間の生活に身近で、肉や卵など日常的に役立ちすぎで、反って有難味が薄く、慣用句など表現上では損をしているように思われます

しかし、身近で、ありふれているというのが、逆に強みとなって、わが国の文化に貢献した例があります。

昨年の生誕 300 年記念展覧会を契機に、「奇想の画家」と言われる伊藤若冲の評価が高まっています。（上野で開催された記念展覧会では 4 時間待ちの行列ができたそうです。）

彼は、当初、中国画の模写をしていましたが、相国寺の大典禅師の助言により写生に転じます。まず手始めに数十羽の鶏を飼って、その観察から鶏の表情の本質をつかみ、それを表現しようと努めます。（手軽に数十羽飼えるのが、鶏の強み）

そうして出来たのが『群鶏図』、『紫陽花双鶏図』、『雪梅雄鶏図』などで、どの画も鶏の表情が生き生きと描かれ、いまにも動き出さんばかりです。

これが、十数年後の円山応挙など日本画の写生の系譜へと連なっていきます。

鶏は日常的で、地味けれども役に立つ。牽強付会かも知れませんが、保険もそんな存在でありたいと思っています。

本年もどうぞよろしく願いいたします。